

## 主 題：神の福音 3

## 聖書箇所：ローマ人への手紙 1章2－4節

ローマ1：1でパウロは自分のことを「パウロ、キリスト・イエスのしもべ、使徒として召され、神の福音のために選び分けられた者」と紹介しました。その後でパウロは、神から大切な任務が与えられた、神の福音を宣べ伝えるという任務、そのメッセージ、つまり、神の福音について説明を展開して行くのです。神の福音とはいったいどういうものなのか？この2節から6節のところ、新改訳聖書には中線——によって記されていますが、そこにこの福音の説明が記されているのです。

## ☆福音とは？

## 1. 神からのメッセージ 2節

まず、私たちが神の福音に関して教えられることは、福音というのは神からのメッセージであるということです。そのことは既に1節で見ましたが、2節でもパウロは私たちに教えてくれるのです。つまり、預言者たちが自分たちの勝手なことを語っているのではない、既に見たように、福音というのは「良き知らせ」という意味で、これは皇帝に関わる良い出来事のことではなく、神から人間への良き知らせ、良きメッセージであると言います。2節でパウロは「この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので」と言っています。この2節の主語は神であり、明らかに「神」がこのようなことをなさったのです。神が前から約束されたことであり、神が預言者たちを通して与えられたものであると、福音に関してパウロはこのように説明を加えるのです。二つの文節に目を留めていただきたいのですが、一つ目は「その預言者たち」とパウロが言っていることです。この「その」と訳されている単語は、実はこれは「彼の」という代名詞が使われています。原語ではそのことを明確にしています。「その預言者たち」がいったいだれに属する者たちなのか、だれの預言者たちなのかを明らかにしているのです。「神が神ご自身の預言者たちを通して」というわけですから、彼らは神の預言者です。彼らのメッセージではなく、神のメッセージを語ったのです。二つ目は「預言者たちを通して」というところです。ここでパウロは「預言者たちによって」と「よって」ということばを使わないで「通して」と言いました。それは、このメッセージの出所というものを明確にしているのです。メッセージは神が預言者たちを使って語られたのであるということをはっきりと示しているのです。つまり、この預言者たちは用いられた媒体であってメッセージの送り手、発信者、源ではないと言うのです。ですから、預言者たちが自分たちによって、自分たちのメッセージを語ったのではないということをはっきりと示しているのです。

神の預言者たちはどのようなことをしたのでしょう？旧約聖書のエゼキエル書3：4に「その方はまた、私に仰せられた。『人の子よ。さあ、イスラエルの家に行き、わたしのことばのとおりには彼らに語れ。』」とあります。「…わたしのことばのとおりには」—— わたし、神が命ずるように、わたしがあなたたちに語れと言うことをそのまま正確に語るようにと言われるのです。ですから、福音というのは神からのメッセージであるということをはっきりと示しているのです。

## 2. 旧約聖書からの教え、旧約聖書に約束されたもの 2節

二つ目にパウロが言わんとすることは、実は、この福音というのは旧約聖書からの教えであり、旧約聖書の中に「福音」は預言されていたということです。

## (1) 神が約束されたもの

神が約束されたもの、故に「聖書において前から約束されたもので」と記されているのです。聖書の中に前もって教え、預言されていたということをはっきりと示しているのです。どこに記されているのか、日本語のこの新改訳聖書は「聖書において」と記しています。しかし、パウロは「聖書」と日本語に訳されているところを「書き記された聖いもの」と記しているのです。この「書き記されたもの」と訳されている名詞は新約聖書の中に50回も出て来ます。そして、そのすべては旧約聖書を指しているのです。ですから、「書き記された」ということばが出て来ると、それは明らかに旧約聖書を指しているのです。例えば、マタイ21：42でイエスが「あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちの見捨てた石。それが礎の石になった。これは主のなさったことだ。私たちの目には、不思議なことである』」と言われました。このみことばは旧約聖書の詩篇118：22から引用されているのです。また、「使徒の働き」8：32で、エチオピアの宦官にピリポが話をするわけですがけれども、彼はイザヤ書の53章を読んでいてとみことばが教えます。そこには、「彼が読んでいた聖書の箇所には」と出て来ます。（「彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかつた。」）。このようナリストは他にもたくさん挙げること

ができますが、この当時、「聖書」というと旧約聖書のことを指しているのです。なぜなら、旧約聖書は存在していましたが、新約聖書はまだ完成していなかったからです。

確かに、日本語の聖書を見ても「聖書」ということばを見ると「聖い記されたもの」と「聖い」ということばがありますが、先ほども話したように、パウロがここで「聖い記されたもの」とあえて記したのは、「聖い」ということを強調したかったからです。パウロが聖書を指すときは、ふつうは「聖書」というところに冠詞をつけるのですが、このローマ1：2と16：26のところではわざと冠詞をつけないのです。なぜそのようにしたのか、パウロはこの書物の聖さ、その性質のことをあえて強調したかったからです。なぜなら、先ほどから見ているように、これは人間が考え出したり、人間が記したのではなく、神ご自身が神の預言者を用いて神のメッセージを語らせ、それを記したものだからです。だから、聖いのです。皆さんがよくご存じのⅡペテロ1：21では「**なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。**」とあります。つまり、神のみことばが記されているのであって人間の勝手な思いが記されているのではないということ、聖書は明確に私たちに教えるのです。

そして、ここでパウロがこの「聖書」と訳されていることばの「聖さ」というものを特に強調した理由は、恐らく、彼自身のメッセージに対してある人はパウロが自分で創作した新しい教えを伝えているのだらうと疑ったからだだと思います。ですから、パウロは、自分が語っているメッセージは自らの創作によるのではなく、実は、それは旧約聖書に基づいたものだと言いたかったのです。人々は旧約聖書が神のことばであると信じているのですから、その聖い神の教えに基づいて、神が約束されたことを私は語っているのだから、あなたたち聞く者はこのメッセージを真剣に、また心から受け入れなければならないと言っているのです。

## (2) 神が成就された

また同時に、この2節のみことばが私たちに教えることは、神が約束されただけでなく、パウロはこの福音、つまり救いというのは旧約聖書の預言の成就であると言います。2節のところをもう一度見てみると「**この福音は、神がその預言者たちを通して、聖書において前から約束されたもので、**」、つまり、イエス・キリストの誕生であり、イエス・キリストの十字架であり、イエス・キリストの復活であり、このすべてのことを私たちは見てきましたが、それは偶然に起こったことではなくて、実は、それは旧約聖書の中にしっかり約束されて来たことが見事に成就したのだと言うのです。なぜなら、旧約聖書の中にはイエスのことが預言されているからです。ルカの福音書24章にエマオの途上にあつた二人の弟子たちのところにイエスが現われた話が出て来ますが、その中でイエスは彼らと何を話されたのでしょうか？ルカ24：27に「**それから、イエスは、モーセおよびすべての預言者から始めて、聖書全体の中で、ご自分について書いてある事からを彼らに説き明かされた。**」と書いてあります。同じ24：44では聖書の預言は必ず成就することを言っています。「**さて、そこでイエスは言われた。『わたしがまだあなたがたといっしょにいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。』**」とあります。つまり、イエスはこのエマオ途上の二人の弟子たちに対して、旧約聖書に記されている預言は必ず成就すると教えられたのです。ルカ24：44で「**モーセの律法と預言書と詩篇**」と三つに分けられていますが、これは当時存在した旧約聖書の三つの区分です。ですから、それは「旧約聖書全体」という意味で、救世主、救い主のことは、旧約聖書の中に記されていることであり、そして、そのことが成就したのだということをイエスはこの弟子たちにも悟らせようとしたのです。

私たちがまた、そのことを知らないといけません。イエスの誕生というのは偶然に起こったことではありません。このすべての出来事は旧約聖書が預言していたことが成就したのです。イエス・キリストの誕生の場所がベツレヘムであることは旧約聖書が預言し、そのとおりに成就しました。救世主はどんな家系に生まれるのか、エッサイの家系でありダビデの父の家系に生まれるのだと預言され、そのとおりにお生まれになりました。誕生の時期に関してもその通りに、誕生の特徴に関しても処女から生まれると預言され、そのとおりにお生まれになりました。イエス・キリストは人々に友によって裏切られると預言され、そのとおりに実現しました。イエス・キリストの死にざまも預言されていました。人々がイエスを苦しめ、ライオンのように手足を引き裂いたと詩篇22篇に出て来ます。そして、彼自身が十字架に架かることも預言されていた通りに起こりました。十字架のもとでの人々の反応もそうでした。旧約聖書には「**彼はあざげられ、侮辱され、つばをかけられる**」とあり、その通りにイエス・キリストは扱われました。旧約聖書はこの救世主は脇腹を刺されるが、彼の骨は折られることがないと預言していました。その通りにイエス・キリストは槍で脇腹を刺されましたが、彼の足の骨は折られることはなかったのです。葬られることに関しても預言されその通りになりました。よみがえりについても預言され、その通りにイエス・キリストは死からよみがえって来られました。ざっと挙げただけですが、この

ように旧約聖書が預言したことはイエス・キリストによって確実に成就したことを私たちは見たのです。

#### ○預言が成就する確率

19世紀、オックスフォード大学教授のキャノン・リドンは「旧約聖書の332個の異なった預言が、キリストにおいて文字どおり成就された」と言っています。皆さんよくご存じと思いますが、ピーター・ストナーという先生——この方は数学や天文学の教授で科学者でもあったのですが、その人は8つの預言のすべてが1人の人によって成就する確率について話をしています。それは10の17乗分の1、ゼロが17個並ぶのです。それはどのようなものか、アメリカ・テキサス州に1ドル銀貨を敷き詰めると60センチの高さになり、その中の一つに印をつけてよくかき混ぜて、目隠しをした人がその銀貨を引き当てる確率だというのです。私たちの身近なことで話すなら、テキサス州の面積は日本の約1.8倍ですから、日本で行なうなら、日本中に銀貨を敷き詰めると高さ108センチになり、その中の一つの銀貨にマークをつけてかき混ぜて、だれかが目隠ししてそれを当てる確率だと言うのです。8つの預言が1人の人物によって成就する確率はそのようなものだと言うのです。どうですか？332個の預言がイエスによって成就したと、これは偶然に起こることでしょうか？このことは、このすべてのことは神のみわざ以外の何ものでもないことを私たちに教えてくれるのです。

#### ○70人訳聖書の存在

もしかすると、ある人は「預言というのは実際に起こった後で記したのではないか、後から書いて、ほら当たったと言っているのではないか」と言うかもしれません。もしそういう人がいたらこのように考えることです。実際に旧約聖書が完成してからイエスが誕生するまで約400年間のギャップがあります。少なくとも、イエス・キリストの誕生に関する預言は、彼の誕生の約400年前に記されているのです。ある人は「そんなこと…」と言うかもしれませんが、実はおもしろいものがこの世の中に残っているのです。それは70人訳です。セプトゥアギンタというヘブル語の聖書のギリシャ語訳です。プトレマイオスⅡ世がエジプトを治めていた頃に、この70人訳というものを始めています。話によれば、イスラエルの12部族から6名ずつの学者を選んできて合計で72名だったのですが、72日間で翻訳させようとしたことからこの名前がついたのだと言われています。このプトレマイオスがエジプトを統治していたのは、紀元前285年から246年で、その間に70人訳をしなさいと命令しました。なぜなら、ユダヤ人たちが離散して彼らがヘブライ語の聖書を読めなくなったから、ギリシャ語に訳したものの必要性を覚えたわけです。そこでこの70人訳が記されたのですが、よく考えると、彼が統治をしていた紀元前285年から246年の間にこの命令がなされたということは、既にその時にはヘブライ語の聖書が存在していたわけです。なぜなら、元になる聖書がなければどのようにして訳すことができますか？私たちは手にしていませんが、70人訳という実際に存在する聖書が記された歴史を見ると、イエスが誕生する二百数十年前には、もう既に完成した旧約聖書が存在していたのです。ですから、もし、後で実際に起こったことを預言が成就したかのように記したとしたら、矛盾が出て来るはずで、ですから、どう考えても、みことばがそのように預言していて、その預言がイエス・キリストによって完全に成就したということは、それが私たちにとって納得のできる結論であるわけです。歴史はこの聖書の預言がイエス・キリストの誕生の前に記されたということを明らかにしているわけです。

ローマ書1章に戻って、ですから、まず、パウロが言ったことは、私の語っているメッセージというのは自分が作り出したメッセージではなくて、旧約聖書の中に記されていたことであり、このイエス・キリストの誕生、このすばらしい神からの救いメッセージ、それは旧約の預言の成就なのだということを告げたのです。

#### 3. 福音は御子イエス・キリストである

三つ目にパウロは3節で福音というのは御子イエス・キリストである、この御子イエスが福音なのだということを教えます。福音のメッセージの核心は御子だと言います。3節に「御子に関することです。」とあります。「御子」という称号は福音書において30回近く使われています。イエスが本質的に父なる神と等しいことを表わしているのです。

#### ○ヨハネの福音書から

ヨハネの福音書を順に見て行きます。バプテスマのヨハネはこのように告白しています。1:29「…自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。『見よ、世の罪を取り除く神の小羊』」と。そして、イエス・キリストのことについて話をして行くのですが、34節に「私はそれを見たのです。」とあります。何を見たのでしょうか？バプテスマのヨハネがイエス・キリストに水のバプテスマを授けたときに「聖霊がある方の上に乗って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。」(33節)と記されていたそのことを「私はそれを見たのです。」と私は実際に見た、このイエス・キリストによってそれが実現したのだと言うのです。その話をした後で「それで、この方が神の子であると証言しているのです。」と結論づけているのです。神の子、つまり、御子のことです。ですから、バプ

テスマのヨハネの証言に基づけば、明らかにこのイエスは御子、神の子である、つまり、父なる神と本質において全く同じ神であるということです。

11章にはマリヤとマルタの話が出て来ます。マルタの兄弟のラザロが亡くなった後、イエスが彼らのところを訪問した時のことが出て来るのですが、ここを見ると、マルタとイエスとの会話が記されています。25-26節でイエスが「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。このことを信じますか。」とマルタに言ったときに、彼女は「はい。主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストである、と信じております。」(27節)と答えます。イエスが神であるということをマルタは確かに信じていたのです。

19章を見てください。今度は祭司長や役人の話が出てきます。イエスが捕らえられてむち打ちの刑を受けました。イエスを侮辱するのですが、6節「祭司長たちや役人たちはイエスを見ると、激しく叫んで、『十字架につけろ。十字架につけろ。』」と言った。ピラトは彼らに言った。『あなたがたがこの人を引き取り、十字架につけなさい。私はこの人には罪を認めません。』」、その後の7節「ユダヤ人たちは彼に答えた。『私たちに律法があります。この人は自分を神の子としたのですから、律法によれば、死に当たります。』」と言っています。イエス・キリストに敵対していた彼らは、イエスのことばを聞いたのです。イエスのご自分を神の子とした、これは神に対する罪だ、死刑に値する罪だ、なぜなら、彼は人間でありながら自分を神と等しくしたからだと言います。これが彼らがイエス・キリストを殺そうとした理由であったことはみことばが教えています。ですから、彼らの発言は「この人は自分を神の子とした」と、つまり、イエス・キリストが私たちの前で明確に自分が神であると言った、だから、死に値すると言ったのです。

#### ○ペテロの証言

思い出してください、ペテロの告白の話があります。イエスが人々がわたしのことを何と呼んでいるかと言われたとき、いろいろなことが出て来ました。そこで「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」と質問された時にペテロはこう答えました。「あなたは、生ける神の御子キリストです。」と。マタイ16:16です。あなたは生ける神の御子、神の子、神だという告白をするわけです。

#### ○悪霊の証言

もう1箇所皆さんに思い出していただきたいのは、ガリラヤ湖畔でのこと、レギオンという大変な力のある悪霊に憑かれていた一人の人の話がマルコの福音書5章に出て来ます。だれも押さえ付けることができないぐらい大変な力の持ち主で、鎖に繋がれていたけれど、その鎖を引きちぎるほどの力を持っていたのです。この悪霊に憑かれていた人物がイエスを遠くから見つけてイエスのもとに駆け寄って来るのです。そこで「大声で叫んで言った。『いと高き神の子、イエスさま。…』」(5:7)と言います。悪霊たちもこの方が神の子であると知っているのです。ある人が言うように、これは神によって生まれた子どもであると、そのようなことを言っているのではありません。父なる神と本質的に同じ神であるということを明らかにしているのです。そうでなければ、先ほどから見て来ているように、イエスを何とか殺そうとしていた人々はそんな選択をする必要はなかったのです。彼らはイエス・キリストの主張を明確に理解したのです。イエスの主張はご自分は神であるということであり、人々はそのことを認め、人々はそのように告白し、悪霊でさえも「あなたはいと高き神の子」、すなわち、神であるということを明らかにしたのです。ですから、このように「神の子」という称号が30回以上も使われているのですが、それがどういう意味なのかを今見て来たのです。

#### ○「神の子」、「御子」という称号について

・ベーカーの神学辞典による説明＝「この称号にも存在と本質における御父との一致、御子の無比な起源と先存性が含意されている」と、つまり、この神学辞典によると、今、私たちが見てきた通り、この称号の中には、その本質においてまた存在において父なる神と一致していると説明しているのです。

・ジョン・マレー教授による説明＝また、アメリカ・ウェストミンスター神学校で組織神学を教えられたジョン・マレーは「パウロは御子という称号は永遠的存在のキリストに適用できるものであり、父なる神との永遠的關係を明らかにするものであるとみなしたのだ」と言っています。この御子という称号は永遠的に存在したキリストにのみ適用されるもの、つまり、イエスはこの父なる神と永遠に存在されている神、救い主なのだということを意味していると言うのです。

ですから、テキストに戻れば、パウロはこの「御子」という称号を用いることで、このイエスが父なる神とともに永遠に存在しておられる子なる神であるということを明らかにしたのです。イエスは永遠に御子なのです。私たちは先ずそのことを頭に入れなければならないのです。というのは、パウロは最初に「御子に関することです」とそのことを言うからです。そして、その後で、御子に関して二つの説明を加えるのです。

#### ◎「御子」に関して

(1) 父なる神とともに永遠に存在する子なる神である

## (2) 人となられた御子

3節に「御子は、肉によればダビデの子孫として生まれ」とあります。これは人間イエスのことです。つまり、この御子は永遠に存在され、父なる神と本質において全く同じである、この神が人となったと言うのです。ガラテヤ人への手紙4：4に「しかし定めの時が来たので、神はご自分の御子を遣わし、この方を、女から生まれた者、また律法の下にある者となさいました。」とあります。つまり、ここでパウロが言っていることは、神がご自分の御子を遣わして彼は人となられたのだということです。ですから、まず最初にパウロは、御子が人となったと言うのです。そして、「肉によれば」と言った後、「ダビデの子孫として生まれ」と言っています。なぜ、彼が人となられたのか、それは彼が私たち人間を救うためにです。なぜなら、先ほども見たように、救い主はダビデの子孫として、ダビデの家系に生まれるというのが聖書の預言だからです。

エルサレムで仮庵の祭りの終わりのときに、イエスが「だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。」と言われました(ヨハネ7：37)。それを聞いていた人たちはまちまちに様々なことを言い始めます。40-42節「このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ。」と言い、41 またある者は、「この方はキリストだ。」と言った。またある者は言った。「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。42 キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」と。エルサレムの人々は分かっていたのです。「キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」と、その通りキリストはベツレヘムで生まれたのです。ガリラヤで生まれたのではなかった、しかも、イエスはダビデの子孫としてお生まれになったのです。そのように預言されていてそのようにイエスは生まれたのです。

使徒の働き13章を見てください。パウロがアンテオケに着いて会堂に入り、人々に話を始めた様子が出て来るのですが、13：23「神は、このダビデの子孫から、約束に従って、イスラエルに救い主イエスをお送りになりました。」と、非常に明確にパウロはイエスがだれであるかということをお教えています。「ダビデの子孫から」と、そのように預言されていたから、預言どおりにイスラエルに救い主を送ってくれた、それがイエスであると。このように明確にパウロはアンテオケで人々に話しているのです。ですから、このローマ1：3でパウロが教えたかったことは、この神であられる方、御子として永遠に存在されておられる方が、人となってお生まれになった、それは私たちを救うために、聖書が預言していたように、ダビデの子孫からお生まれになったということです。

## (3) 救い主

4節を見ると「聖い御霊によれば、死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方、私たちの主イエス・キリストです。」と記されています。もちろん、ここを見ると、イエスは確かに人となられたけれど神なのだということをお教えるのです。この「聖い御霊によれば」ということばですが、3節と4節を見たとき、見事に対比されています。3節は「御子に関すること」で「肉によれば」、4節では「聖い御霊によれば」と対比されているから、ここではイエス・キリストがもっておられた聖いご性質、神としてのご性質のこと、それを言わんとしたのだと見ることもできるのですが、どうもパウロが言わんとしたことはそうではなかったようです。確かに、イエス・キリストというお方は完全に人間であり完全に神でした。こんな人は人類の歴史の中のどこを探してもいません。パウロはその説明に時間を要しているのではないのです。なぜなら、もう既に「御子に関すること」だというときにその説明をしているからです。ここでパウロは、この御子がどんなにすばらしい救いのみわざをなされたのかを説明しようとしているのです。言い方を変えれば、福音とはいったい何なのかをパウロは教えようとしているのです。

「死者の中からの復活により、大能によって公に神の御子として示された方」、今、ここから二つのことを私たちに教えてくれました。「死者の中からの復活により」というのは、イエスの死からの復活のことを言っているのはだれが見ても明らかです。この復活が明らかにしていること、復活によって何が明らかにされたのか、それは「大能によって公に神の御子として示された」のだと言うのです。復活がそのことを明らかにしたということです。この「示された」ということばは非常に上手な表現を使っているのですが、このことばの元になっているのは「境界線を引く、境界線を定める」というのです。そのことによって区別がはっきりします。ここからこっちは私、ここから向こうはあなたと、境界線を引くことによって区別ができます。ですから、「公に…示された」というのは、明らかでなかったことが明らかにされたと言うのです。境界線を定めることによって区別がつくように、イエスがいったいだれなのかということが明らかになった、そのことをパウロは教えようとしているのです。ですから、この復活によってイエスがだれなのか明らかになったのです。

しかも、「大能によって」とあります。「大能」ということばは国語辞典には出て来ません。余り使わないことばです。これは「力を持って、力とともに」と訳せることばです。ですから、パウロが言うのは、イエスの復活というのは、イエスが力をもった御子、神であることを明らかにしたということです。

つまり、人間がどうすることもできない死という力に打ち勝つことのできる、それほど力がある方だ、この方は罪に沈んでいて罪の中でどうすることもできない罪人を救い出すことができる、その力をお持ちなのです。全能の神なのです。そのことが明らかにされたと言っているのです。それまで人としてこの世におられたときは隠されていたことが、この復活によって明らかにされたと言ったのです。イザヤ書53章でイザヤは救世主に関してこのように言っています。53：2「…**私たちが見とれるような姿もなく、**」と。しかし、復活された後、彼は力に満ち溢れたお方だと言えるのです。間違っていたきたくないのは、復活によってイエスはだれか別のものになったのではないのです。かえって、復活によって本当の姿が明らかになったのです。復活がイエスはいったいだれなのかを明らかにしたのです。彼は神の御子であると。

もう一度4節を見ると私たちは、御子である方が人となった、その目的は人を救うためであり、そして、その方が十字架に架かり、死んだ後三日後に死からよみがえって来た、そのよみがえりをもってこの方がいったいだれだったのかを明らかにしたと、そのことが分かります。そこで4節の最初に「**聖い御霊によれば**」とありますが、これはイエスのご性質のことではなく、このすべてのわざ、復活のわざがだれによって行なわれたのかということです。つまり、ここで言っている「**聖い御霊**」というのは聖霊なる神のことです。聖霊なる神によって、イエス・キリストは死から敢然とよみがえって来たというのです。だから、パウロはローマ8：11でこのように言います。「**もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください。**」と。もちろん、聖霊なる神だけが働いたということ言っているわけではありません。神がわざをなさったのですが、このローマ1：4で言っていることは、この復活が何を証明したのか、復活によって何が明らかになったのか、それに関わっていたのがこの聖い御霊、つまり、聖霊なる神だということです。イエスの生涯を見たときその通りでした。イエスが公の生涯を始められ、バプテスマをお受けになったときに、聖霊が彼の上に臨んだ、そして、聖霊に導かれてイエスは歩まれた、あの荒野に退かれたときもそうでした、そうして御霊に導かれたイエス、その聖霊なる神が彼をよみがえらせることによって、公に人々の前で彼がいったいだれなのかということ明らかにしたのです。

ですから、パウロが言いたいことというのは、このイエスが神から与えられた福音、救いのメッセージであるということです。福音のメッセージというのはイエスに関することであって、イエス・キリストこそがこのメッセージそのものであると言っているのです。なぜなら、このイエスによって信じるすべての人の罪が赦されるからです。

今日、私たちが見て来たことを思い出してください。永遠に神であられる御子が受肉によって人としての歩みを始められました。御子としての歩みが始まったのではない、彼は永遠に御子なのです。しかし、この歴史上において、彼は人としてこの地上を歩み始められたのです。すべてにおいて完全に罪のない生活を過ごされたこの御子が、あなたの身代わりに十字架に架かって、あなたの罪のさばきを、呪いを取り去ってくださったのです。そして、約束どおりに、三日後にその死より力をもって敢然と復活されたことにより、このお方こそが神の御子、約束の救世主であることを明らかにされた、だから、パウロは4節の最後にこのイエスは「**主イエス・キリストです。**」と言うのです。ここで、その方が「イエス」だとは言わず、パウロは「**主イエス・キリスト**」という呼び方をしているのです。パウロはこの「主」という称号を275回も使っています。尊敬を込めてこのように言うこともあるのですが、パウロの場合は、崇拝を捧げる神に対してこのように「主」ということばを用いています。つまり、パウロが言いたかったことは、このイエスは「主」、すなわち神であり、そしてキリストである、つまり、救い主であると言うのです。「イエス」、「主は救いだ」という意味です。神であり、そして、真のキリスト、救世主であると言います。

この4節でパウロは、福音のメッセージというものが何なのか、すべてはイエス・キリストなのだ、このイエス・キリストこそが神が私たちにくださった福音なのだを教えています。このキリストによってのみ人間の罪が赦されるのです。パウロは「**私たちの主イエス・キリスト**」と言いました。つまり、この主イエス・キリストを彼自身は自分の主として、キリストとして信じていたからです。どんなに正しい知識を持っていてもそれが自分のものでなければ空しいものです。どんなにイエス・キリストが救い主であるという知識を持っていても、それを信じていなければその救いの効果はその人の内に発揮されません。パウロはイエスがだれであるかを知っていました。それだけではありません。パウロはこのイエスを自分の主として、キリストとして受け入れていたのです。それが最後にこの告白に表われているのです。「**私たちの主イエス・キリスト**」であると。

私たちが考えなければいけないことは、あなたご自身がこの救い主をあなたの神として信じておられるかどうかです。キリストの誕生というのは、私たちは神の愛の証として覚えます。私たちのような罪

人を覚えて神は救い主を送ってくださったと。でも、どうもクリスマスというと神の愛だけがクローズアップされます。私のような罪人を愛して神が救い主を送ってくださったと。でも、この愛を見る時に、私たちは神がどういうお方であるかを思います。神はさばき主です。もしさばきがなければ救われる必要もないのです。死んで終わってしまうのなら、救い主を送る必要もなかったのです。でも、救い主を送り、あなたを救おうとしておられるという事実は、このまま神を拒み続けるなら、必ずあなたはいつか自分の罪のさばきを受けなければならないことを示しているのです。神は愛なる方です。しかし、同時に神はさばき主です。厳しい、罪を憎んでおられる方です。どんな罪をも見逃さない方です。そのことを私たちは覚えなさいといけません。キリストの誕生はすばらしい、私たちに対する神の愛を見ます。しかし、その裏には神の厳しいさばきが約束されていることを覚えなければいけません。私たちの周りの愛する者たちがもしこの神に逆らい続けているなら、間違いなく、彼らは今永遠のさばきに向かっているのです。そのことを知っている私たちには、語るべきメッセージがあります。福音のメッセージです。救いのメッセージです。このイエス・キリストを私たちは伝えるのです。なぜなら、これだけが神が私たちにくださった福音だからです。